



▲25ヶ国以上から集まったコーヒー豆を焙煎



▲「KURAMAEモデル」関連商材



▲「KURAMAEモデル」タンブラー

## 焼きたてコーヒーで縁をつなごう

ギフト・ショー  
初出展

### (株)縁の木



▲「KURAMAEモデル」イメージ

**昨**今、個人経営のカフェが増えつつある街、蔵前。それぞれのカフェ・焙煎所で共通の課題として、美味しいコーヒーを淹れる毎日の焙煎でどうしても出てしまう欠点豆や残滓がある。日々の生活や業務の中で生じる、捨てられるモノや古くなったモノに、企業のものづくりの技術や専門家のアイデア、福祉事業所の手仕事などを入れることで、新しい価値を与えて生まれ変わらせるのが(株)縁の木が2020年から提唱を始めたアップサイクルプラットフォームの「KURAMAEモデル」だ。

(株)縁の木は、2014年に知的障がいのあるお子さんを持つ白羽

玲子氏により設立。同氏は様々な「課題」を解決したいと考えていた。例えば、支援学校でそれぞれに自分の好きなことを見つけた当事者が実際に働き始めるとき、職業の選択肢が3〜4種類しかないという現状がある。そのため「珈琲焙煎処 縁の木」は、地域に溶け込む障がい者の働き口の一つとして始まった。また、売り上げを社会問題の解決に繋げるため、焙煎するコーヒー豆は、紛争などによる課題を抱える国など、25ヶ国以上から仕入れている。

展示会のノベルティやオフィスにコーヒー豆を卸している同社は、新型コロナウイルスで売り上げが激減。しかし、それにより勤務時間が短縮した個人カフェの経営者と共に、前述した共通の課題解決に向けた「KURAMAEモデル」の構想を煮詰める時間が生まれた。

2020年から始まり、今では「KURAMAEモデル」の関連商材は10アイテムにまで増えている。しかし、同社は今後その範囲を台東区、東京都へと広げていくことは目標にしていない。「KURAMAEモデル」というひな形が、お互いに顔が見える程度の小さいコミュニティとして各地に波及するのが理想だ。アップサイクル製品は、出口戦略で苦戦することが多い。作

り手と買い手が相互に地域の課題を認識していれば、解決するための協力や販売がより容易になるはずである。

アップサイクルを議論する中で、大規模で廃棄されるモノと比べれば、小規模での活動は、無意味だと、否定的な意見もあるという。しかし、同社が大切にしているのは、他の事業者が商品企画を立てやすくするなど後に続くための土台作りである。

同社は現在「KURAMAEモデル」を通して、コーヒー豆で染めたサコッシュやコーヒー豆の残滓を取り入れたタンブラーを試作している。また今夏には、農家に提供したコンポストから生まれた堆肥で育った野菜を販売する予定だ。

株式会社縁の木

<https://en-no-ki.com/>

「KURAMAEモデル」

<https://kuramae-model.org/>



KURAMAE model

▲「KURAMAEモデル」ロゴ